

2018年1月4日

2018年新年に想う－未来を思うことについて－

九州工業大学学長 尾家祐二

“未来を思考する「モノづくり」と「ひとづくり」”

新年おめでとうございます。

年の初めは、改めて、自らが何者であり、何を思い、何を行ってきて、今後何を行いたいのか、そして、どうあるべきかについて思いを馳せる良い機会だと思います。

本学の前身である明治専門学校が開学した100年以上前の日本においては、産業振興が重要課題であり、それを担う人材育成は急務でありました。そして、「技術に堪能なる士君子の養成」をモットーに教育研究活動を行ってきました。私たちは、その出発点を意識しつつも、変化し続ける社会との相互作用の中で、自らを捉え直し続け、活動を継続していくことが重要であると考えます。今を生きる私たちは、もちろん今を把握し、今を大切にしなければなりません。それと同時に、育つ人が活躍する未来、創造した知が活かされる未来に思いを馳せ、未来を育てる営みに参加していることを自覚した活動を行いたいと思います。

さて、昨年12月にカズオ・イシグロ氏がノーベル文学賞を受賞されました。長崎県の生まれで、お父様（世界的海洋学者の石黒鎮雄氏）が、本学の前身である明治専門学校（北九州市）で学び、御卒業されたことを知り、受賞をさらに嬉しく思います。その受賞講演および晩さん会の挨拶では、人々が憎しみを増幅させ、激しく敵対する現代において、私たちを隔てる壁を乗り越えるような活動の大切さを訴えています。そして、私たちはさらに多様でなければならないと述べています。

世界が巨大な困難に直面していた第二次世界大戦のときに、アルメニア人であるサローヤンが、サンフランシスコで小説「ヒューマンコメディ」（サローヤン著、小川敏子訳、光文社刊）を執筆しました。主人公のホーマ（14歳）は、学校に通い、電報配達の仕事もしています。戦時中ですので、戦死を知らせる電報も配達しなくてはいけません。そのような中、放課後、彼を残して話す

古代史の担当のヒックス先生の言葉が大変印象的でした。「民主主義の国では、基本的に人はみな平等です。でも、一人ひとりの努力しだいでいろいろなちがいが出てくるわ。私が教えているみんなには、努力をおこたらず胸を張って生きてもらいたいと思っています。それぞれの個性に注文はつけません。お行儀がいいとか悪いとか、まったく問題ではない。そうした表向きのふるまいの奥にある人間性に、私は注目しています。」「人としての温かさがあるかどうか。真実を尊び胸を張って生きる、短所も長所も自分の一部として受け入れる。それが大事なのよ。人間としてはそれでじゅうぶん。」「そういう人間性が育っているなら、あとは思いのままにふるまえばいいの。一人ひとりが自分らしくあってほしい。」

そして、そのような大変困難な時代にあって、ヒックス先生は次のように続けます。「気に食わない相手に尊敬の気持ちを抱くのは不可能ではない。それがわかった時、人は人間性にめざめ、教養を備えた人間として磨かれていくのです。」

今、世界（国連サミット）は、持続可能な世界を実現するための国際目標として、17の持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals, SDGs)を掲げています。「貧困を無くそう」が1番目の目標として始まり、4番目は「質の高い教育をみんなに」、7番目は「エネルギーをみんなに、クリーンに」、9番目は「産業と技術革新の基盤をつくろう」、12番目は「つくる責任、つかう責任」、そして17番目は「パートナーシップで目標を達成しよう」です。持続可能な世界を実現するために、高度な技術を身につけた人材が、多様な人たちと連携して貢献することが大事になります。

カズオ・イシグロ氏の思い、ヒックス先生の教え、SDGsへの取組み、これらが示す分断するのではなく多様性を認め合うことの大切さ、未来を思考することの意義を多くの人たちが共有することによって、このような考え方、取組みに対する価値はさらに高まります。

本学は、未来を思い、高い社会的価値を備えた教育研究活動を実践し、様々な人たちや組織と、その価値を共有できるようにしたいと考えます。

新たな年、皆様が多くの良い機会に恵まれ、幸せな思いで過ごされますことをお祈りします。